

徳川家康公の身の回りの品々

徳川家康（1542-1616）公の身の回りの品々は、杖、薬瓶、漆塗りの櫛など、家康公の日常生活を知る上で重要な意味を持っている。家康公は、1603 年から 1605 年まで将軍を務めた。家康公は 1603 年から 1605 年まで将軍を務めたが、引退後は少年時代を過ごした駿府（現在の静岡市）に戻った。家康公は隠居後も政治的影響力を行使し、外国との外交や貿易を自ら行った。家康公の遺品には、外国の要人から贈られたものも多い。

久能山東照宮の所蔵品には、家康公の書斎にあった机や燭台、硯箱、墨のついた筆などが多く含まれている。これらの品々を使って、蠟燭を灯した低いテーブルの上で、筆を片手に薬理学の本を読んだり、手紙を書いたりしている家康公の姿を想像することができる。

家康公は特に薬学に興味を持ち、自分や家族、家臣のために薬を調合していた。家康公の遺品には、参考にしたと思われる朝鮮の薬の本がある。また、家康公が自分で作ったと思われる粉が入った瓶がいくつか残っており、薬を作るための臼と杵、包丁などもある。

また、家康公は鷹狩りにも熱心だったという。駿府城公園の家康像をはじめ、多くの家康像が鷹を腕に乗せている。当館では、家康公が外出時に使用していた杖や藺草で編んだ帽子などを所蔵している。また、持ち歩いていたであろう携帯用の硯箱もある。

また、茶道具も数多く所蔵されている。客をもてなすための貴重なものではなく、日常的に使われてひび割れたり、擦り切れたりしたものが多い。

総点数 191 点は重要文化財に指定されている。